

No. 365【2019年7月19日配信】

明治時代のイギリス艦隊寄港 (担当:鈴木)

こんにちは！いよいよ子どもたちは夏休みですね♪

先月のメルマガでは、明治44年(1911)6月22日に青森市民が英国王ジョージ5世の戴冠式を祝ったお話をしました(No.360 6月14日配信)。今回は、そのとき少しご紹介したイギリス艦隊と国旗にまつわるお話です。

明治39年7月下旬、日英同盟を締結してから初めてイギリス艦隊が青森港にやって来ることになりました。さらに同じ時期、日本の帝国艦隊も日露戦争後初めて入港するとの知らせがあり、青森市は歓迎ムードに包まれます。

そこで、市はイギリス艦隊を迎えるにあたって歓迎の意を表すために、日英両国旗を交差して飾ることを決め、市民もできるだけ両国旗を飾ってほしい、開港地の市民として同盟国の国旗くらいはぜひとも準備すべきと伝えました。

それを受けて、市内の商店は英国旗を仕入れて販売することにしました。『東奥日報』記事によれば、7月21日から市内8つの商店が布製の大小国旗を販売し、ほかに軒先・店頭の飾り用に紙製の日英の連続旗を販売した店もありました。

新聞では英国旗の由来が紹介され、また英国旗は向って左、日章旗は右に、旗竿は英国旗を外側に交差すべしと指導しています。

ほかにも、市は棧橋と将校歓迎会の会場前に緑門をつくり「WELCOME」と書いた額を取り付け、日本郵船青森出張所ほか市内の回漕業者や船友会と共催で、港町青森にふさわしい船行列と打上花火で歓迎する計画を立てました。通訳は中学校教師や役所の技師等に依頼し、さらに県では、乗組員上陸の際に通訳が不足する事を考え、中学生たちにも勉強を兼ねて協力してもらえよう学校に配慮を求めています。



日本郵船青森出張所
(『目で見える青森の歴史』より)

入港予定日の7月25日、市内の各家では軒先に日英両国旗を交差して飾り、英国章入りの提灯も吊るし、町の辻や要所には吹流しや万国旗、大きな両国旗が翻りました。人々は大きな期待をもって艦隊を待ちましたが、8月になってもイギリス艦隊は現れません。さらに28日頃と伝えられていた帝国艦隊の寄港も変更になり、人々は落胆しました。

そして翌40年8月、ようやくイギリス艦隊は青森港にやってきました。大勢の人が軍艦を見に港を訪れ、市民は今度こそ国旗や提灯、花火や船行列などで大歓迎しました。準備した英国旗は、このとき大いに活躍したことでしょう。

ただ、明治43年5月に青森は大火に見舞われ、市街地は大きな被害を受けました。そのため、せっかくの英国旗が焼けてしまった家もあったのではないのでしょうか。もしかすると、翌年の英国王戴冠式の際に飾られたのは、このときの英国旗ではなかったかもしれません。